第３２期新潟市社会教育委員会議

実施年月日	第５回　　平成２９年３月２１日（火）実施		
会　　場	クロスパルにいがた４階　４０３講座室	傍聴人	０人
会 議 内 容	１．開会 ２．協議・報告事項 （１）教育委員との懇談会について （２）建議「『学びの循環』による人づくり」関係事業について （３）建議策定スケジュール及びグループ分けについて （４）平成２９年度 社会教育関係団体補助金について ３．事例研究 （１）学生パソコン応援団「エール」との懇談 ４．その他 ５．閉会		
出　席　者	【社会教育委員】 伊井　昭夫　　小川　　崇　　神林　むつみ　　雲尾　　周　　田村　祐一 鶴巻　清美　　南雲　保子　　横坂　幸子　　渡邊　喜夫 【事務局】 長浜教育次長　　三保中央図書館長　　佐々木地域教育推進課長 五十嵐中央公民館長　　小林中央図書館企画管理課長 松田中央図書館サービス課長　　井関生涯学習センター所長 生涯学習センター（鈴木次長補佐、井浦係長、野坂主査、井部主事） 中央公民館（玉木主事）		

会　議　録

１．開会

（事務局）

これより第32期新潟市社会教育委員会議第５回を開催いたします。

本日は、齊川豊委員、本間莉恵委員から欠席の連絡をいただいております。なお、新潟市社会教育委員の会議運営規則第９条に定める開催に必要な人数を満たしていることをご報告いたします。

本日、傍聴の希望はございませんでした。当会議につきましては、会議録作成の必要がございますので、録音と写真撮影させていただきますことをご了承ください。

２．協議・報告事項

（１）教育委員との懇談会について

（雲尾議長）

よろしくお願いいたします。

先日３月15日に開催いたしました新潟市教育委員との懇談会につきまして、まず事務局より概要報告をお願いいたします。

（生涯学習センター主事）

それでは、教育委員と社会教育委員との懇談会の概要につきまして報告させていただきます。お手元の資料１をご覧ください。

先週３月15日水曜日、午後１時30分から午後２時30分まで、市役所本館６階の講堂３で懇談会をしていただきました。出席者は前田教育長、それから教育委員８名、社会教育委員９名、そして事務局が14名、合計32名で実施いたしました。

懇談内容ですが、まず冒頭で委員の皆さんから自己紹介をいただきまして、そのあと雲尾議長から、今日はお配りしていないのですが、こちらのＡ３の資料を使って、これまでの取組について説明をしていただきました。

次に、建議「『学びの循環』による人づくり」について、伊井委員、それから南雲委員のお二人から、ご自身の活動を通して普段感じておられることを中心にお話をいただきました。

そのあとで教育委員の皆さんと懇談をしていただいたわけですが、そこで出た意見としましては、教育委員の伊藤委員から、いいことを人から人へ伝えていくことが大切。そのために伝える工夫が重要だというようなお話がありました。それについては、南雲委員からＰＴＡ活動を例にとってお話をいただきました。

教育委員の沢野委員からは、子ども食堂の様子についてどうでしたかという質問がありまして、これについては視察に行かれた本間委員、それから横坂委員、渡邊委員から視察に行かれた際の様子についてお話をいただきました。

その後は「うちの発掘プロジェクト」について、地域の若い人の活動なので、そういった活動がどういう様子で行われていますかというようなお話がありまして、教育委員の伊藤委員、田中委員から、内野出身でない方がどうしてこんなにのめり込めるのかというお話がありました。藤田委員からは、地元ではない他県の人が自分の地元を褒めてくれると、地域の良さに気が付くのではないかとのお話がありました。

最後に雲尾議長から、そういった外部の人も加えて、地域の人の頑張りをどのように引き出すのかが重要ですというお話をいただいて、懇談は終了いたしました。

前田教育長からは、初めての試みだったのですが、教育委員にとっては生涯学習・社会教育について理解を深める機会となり、社会教育委員の皆さんにとっては、建議づくりに当たって、今回の懇談が参考になればとのことでした。最後に建議がまとまったら来年度報告をいただきたいというお話で閉会となりました。

（雲尾議長）

ありがとうございました。それでは参加された皆さんから意見や感想等ありましたらご報告いただければと思います。いかがでしょうか。時間も１時間という短い時間でしたが、もうちょっとしゃべりたかったという方もいらっしゃったかと思いますが、そのしゃべり足りなかった分を今、ここでもう少しこういうことも話したかったということがありましたら、それも含めてお話いただければと思います。いかがでしょうか。

出られなかった方で何か言いたかったというのはありますか。

（小川委員）

逆に伺いたいのですけど、教育委員の方々というのは、これをやってみてどういう感触を持たれたのでしょうか。もし教えていただけるところがあればお願いします。

（生涯学習センター所長）

事前に、私からこういう趣旨で社会教育委員の皆さんと懇談をしますよという説明を、実はさせていただきました。その時の感触では、委員にもよるのですけれども、何を話していいのかなというようなご意見もあったり、社会教育委員経験者の委員の方もいらっしゃったので、いいことだと、どんどんやりましょうというようなご意見もいただきました。

終わった後に教育委員会の定例会がございまして、そこは私も出席しているのですが、正直時間が足りなかったねと、もっとやりたかったねという声が聞こえてきました。ですから、感触としては非常に有意義だったなというような空気を感じました。

（雲尾議長）

ありがとうございました。そのほかよろしいでしょうか。

では、これで終了としまして、今後の参考にするということと、今後も、来年度以降も続けてまいりたいと思います。

（２）建議「『学びの循環』による人づくり」関係事業について

（雲尾議長）

31 期の建議をふまえた今年度の取り組み状況を各担当課より説明いただきます。【学校】、【社会教

育施設】、【地域】の分類で説明をお願いいたします。

ではまず「学校を舞台にした循環型生涯学習」からお願いします。

（地域教育推進課長）

では、私から話をさせていただきます。地域教育推進課です。学校を舞台にした循環型生涯学習ということで、当課から２つの事業をあげました。１つ目が地域と学校パートナーシップ事業です。資料２の１ページから載っておりますが、今年度は事業がスタートして10年を迎えました。たくさんの方々から学校の教育環境に配慮していただくとともに、子どもたちと一緒になって活動をしていただくことが増えてきています。

それで、２ページを見ていただきたいのですけれども、31期の社会教育委員からの提言・課題ということで３ついただいていました。１つ目は、地域教育コーディネーターのスキルアップ、それから次世代の育成、待遇の改善が課題であるということです。たくさんのボランティアの方々から入っていただくとともに、この事業が認知されてきますと、たくさんの要望、それから学校と地域をつなぐ事案が出てきています。そのことについてだと思います。

２つ目は、学校の地域連携担当の明確な分掌位置づけが必要であるということ。特にコーディネーターとともに、学校の窓口としてどういう人が対応し、どんな役割をしなければならないか、ここを明確にせよということかと思います。

３つ目は学校はニーズが無いとためらうことなく、時間と場を創出する必要があるということで、この事業をいかに学校経営、学校運営に活かしていくかについて、しっかりとビジョンを持って活用していただきたいというメッセージかと思いました。この３つについて、それぞれ今年度の取り組みについてお話をします。

まず①についてですけれども、新任コーディネーター研修を年２回実施しました。課の方では、コーディネーターの複数制を奨励しています。お一人で抱えるのではなくて、役割分担をしながら得意な分野でお仕事をしていただく。また、一人だとなかなか決断できないけれども、二人だと相談しながらできる。代役もできるということなので、複数制を奨励しました。そのことで、今年度は40名、約40名の新しい地域教育コーディネーターの方が誕生しました。その方々も初めてコーディネーターの職に就くということで大変不安を感じていると聞きましたので、その方を対象にした研修会を２回持ちました。さらに、新任コーディネーターには、アドバイスコーディネーターという方をつけて、伴走型で支援をしていただけるような体制をとりました。このことによって、新しくコーディネーターになった方も安心してお仕事をされたのではないかと思います。

また、事業の認知とともに、コーディネーターの執務時間についても苦慮しているところではあります。やりたいのだけれども時間が足りないとか、いろいろな要望が上がってくるのだけども、これはどうしたらいいだろうかというところであります。このことについて、勤務実態調査を実施し、その様子をこちらで把握したということでございます。

２つ目の学校の地域連携担当の明確な位置づけについてですけれども、これは事業の中で、要項の中で、パートナーシップ事業推進担当を校内に置くということがきちんと明示されています。その方々からは、どんなお仕事をしてもらうかということをきちんとお伝えしなければならないと考えました。そこで、いつもコーディネーターと学校担当者と一緒になって研修していたのですけれども、第１回目については、それぞれ別室にわけて、学校担当者には学校担当者に、こういうことでコーディネーターの関係を作ってください、学校の役割はこういうことなのですよ、ということをしっかりとお話をしました。

③について、ためらうことなくというのですけれども、これについてはきちんと校長先生を対象として、地域連携のマネジメント研修を実施して、とにかく学校の教育ビジョンの具現のために、地域連携をどういうふうに活かしていけばいいかということについて、情報交換を行いました。また、今後一方的に学校の応援団作りではなくて、児童・生徒が地域に出ていって、学んだことをしっかりと生きる力として活用できる、そういう場をつくることが大事ですよね、ということで、マネジメントに活かしていただけるように、そんな研修にいたしました。

それから、次年度については、今後いろいろな要望が地域から上がってきたり、学校からもいろいろなことを発信していかなければならないのですけれども、学校の地域連携担当とコーディネーターの職務の明確化、それから提言をふまえた、全部が、数を上げることが一番ではなくて、その学校の実態に合った、強みを活かした、そういう取り組みをお願いしますということで、研修を進めたいと思っています。

また、校内研修の題材になるように、いろいろな情報を提供して校内研修の充実を図っていけるようにと考えています。

３ページには当課が考える課題ですけれども、先ほども話しました繰り返しになりますが、かなり事業の周知にともなって、地域から学校への期待が増加しているというところがありますので、それぞれの職務用件をしっかりと明確にしつつ、国のいう協働活動が新潟市でも充実して行っていくような、そういう働きかけをしていきたいと思っています。

続いて４ページです。ふれあいスクール事業についてですけれども、これについても平成 14 年からスタートした事業ですけれども、現在市内の小学校 67 でふれあいスクール事業が行われています。参加している延べ人数は４ページのところはだいたい維持している形ですけれども、回数がそれほど多く確保できない中でもこれだけの数の参加があります。

平成 26 年度については平均参加率というのがあって、１回の実施あたりに全校児童の何パーセントくらいが来ているかということについては、平成 26 年度、たしか 13.3 パーセントだったのですが、27 年度については 14.1 パーセントで、若干ですけれども参加率は増えてきています。運営主任、それからボランティアの、不断の取り組みというのがこういう形で出てきたのではないかなと思っています。

このような活動の中で、５ページの提言をいただいています。ふれあいスクールのスタッフのスキルアップとか、ここも次世代の育成など、それから学校担当者の位置づけ、それから時間と場の創出とあります。ふれあいスクールにかかわってくださるスタッフの研修会の充実を図っていまして、必ず１回は実技講習会を行っています。子どもたちが、簡単な材料で短い時間で、そしてものを作って遊べるというものを実技講習として行っていますし、これについては、ふれあいスクールのスタッフの方とひまわりクラブの支援員と、両方の方をお呼びして、一緒にできるような工作も考えて行っています。

また、今後、私たちはふれあいスクールとひまわりクラブとで連携をしながら、実施していくことが、放課後の子どもたちへの対策になり、授業対策になっていくのではないかと考え、どんな情報交換を行っているか、どんな連携を行っているかなど、各学校の様子をお話しいただくような場も設けております。こういうことを図りながら、スタッフのスキルアップを図っていきたいと考えました。

２つ目は土曜プログラムというものを整備しています。学校以外の場でその地域の方々がお持ちの特技だとか、企業やＮＰＯだとか、そういうところから協力していただいて、ふれあいスクール事業で何かできることはないかということで、そういうプログラム集を今年度は作成して、各学校にお配りしました。例えば、ある食品メーカーがマヨネーズ作りを子どもたちと一緒にやるとか、スポーツ振興会の方々が来てくださって、子どもたちにフロアカーリングを何回か教えて、大会まで参加するというようなことがあり、かなり充実が図られてきているのではないかと思います。

それで、今後当課が抱える課題については、６ページなのですけれども、ふれあいの日常化を図りたい。そのためには、もう少しふれあいスクールの開催回数を増やしたいと考えているのですけども、なかなかボランティアが広がっていかないというところがあります。どうしたらそういうところを広げていけるかということについては、各学校に出向いて説明を行っているところですけども、ちょっとここがうまくいかずに苦しんでいるところです。

また、ひまわりクラブとの連携も図っていきたいと考えております。

（雲尾議長）

ありがとうございました。ただ今の説明につきまして、お気づきの点やご質問等ありましたらお願いいたします。

（伊井委員）

３ページ目の担当課が考える課題というところで、コーディネーターの職務が増加しているという件ですが、やったことがないのに申し訳ありませんが、我々に地域教育コーディネーターの顔が見えないのです。なんとかして地域の人に地域教育コーディネーターという人がいるよということを、例えば、ふれあいスクールに出てくるスタッフの人たちにもう少し説明するなど、情報発信が必要ではないかと思います。

それから、地域教育コーディネーターの職務がなぜそんなに増加しているかというのが見えない、分からないというのがあります。

私は、有明台小学校のふれあいスクールに土曜日と水曜日に参加させてもらっていますが、確かに以前よりスタッフが減ってきていると思います。どうしたらボランティアを増やすことができるかと大変ですが、去年、社会教育研究大会で千葉へ行ったときに、子どものためにと言うと、引き受けてもらいやすいというお話がありました。子どものためにという理由でスタッフを採用したらどうかと思います。

それから、少し乱暴な言い方かもしれませんが、「学校が無くなったら地域がだめになってしまうよ」などと危機感をあおった方が、ボランティアの人が出やすくなるのではないでしょうか。そうでもしないとボランティアが増えて来ないのではないかという気がします。いかがなものでしょうか。

（地域教育推進課長）

まず、地域教育コーディネーターの顔がなかなか見えないというご指摘があったかと思います。なかなか事業の周知が図れていないのであれば、やはり考えなければいけないと思うのですけれども、学校ではコーディネーターがお便りを出して、地域の回覧に乗せてもらったり、地域の皆さんが参加できるような参観日を利用して、学校での地域連携の取組について紹介させていただいたりして、いろいろな機会をとらえて働きかけを行っているところです。

それから、どうして地域教育コーディネーターの職務が増加してきているかというと、地域連携ならこれもやってほしい、この会議にもコーディネーターから参加してほしい、そういう要望が年々増えてきているという状況があります。コーディネーターについては、学校が行いたい教育活動と、地域から上がってくる教育活動を結びつけたりマッチングしたりするところを、実はお願いしているのですけれども、それを例えば、地域からこういうことをやりたいのだけど、コーディネーターに何かお願いできないかといって、コーディネーターがそこの判断を迷ってしまうところがあるのですが、これは、学校が受けるか受けないかのことなのですね。その辺りが正確に伝わっていかないというところがあって、それがコーディネーターの仕事を煩雑にしているところになっているのではないかなと思います。

ですので、そこで役割というのをきちんと明確化していかなければならないというのが、私たちのスタンスなのですけれども、鶴巻さん、コーディネーターとして、活躍、活動していただいてきた中で、職務が増加していることについてはお考えになったことはないでしょうか。

（鶴巻委員）

コーディネーターになって６年が終わろうとしています。来年度７年目になります。コーディネーターが学校に配置されているということを、地域の方々がだんだん認識してきますと、コミ協なり自治協なりが、今度は、地域にこんなことを、生徒を出してくれよ、まちに出してくれよ、田んぼサッカーがあるのだよ、こんなのがあるのだよといって、どんどん地域からの要望が増えてくるというのが１つあります。

それから、学校の中でも地域教育コーディネーターが入ったことによって、家庭科の浴衣だったりだとか、郷土ののっぺ作りだったりというところに、ボランティアに入ってもらって、生徒と一緒にやってもらおうじゃないかというのは、年々増えてくるわけですよね。

お互いに、学校も地域も、それぞれ要望しているものがどんどん増えてくるので、コーディネーターは、年間の職務の与えられている時間数が決まっているので、際限なくお仕事ができるわけではなく、その時間の中でやっていくということになると、外枠は決まっているのに、中身がどんどん増え

てきてしまっているので、職務が増加しているというところにつながってきていると思います。

（田村委員）

私は、新潟市の学校に勤めて、これで３校目になります。そのうち２校が地域教育コーディネーターになると、自動的にそれぞれコミュニティ協議会のなんとか部会の部長とかに、そのままなられるという方が３校中２校でありました。そういう方の中で、今、おっしゃったように、地域からの要望、学校をこういうところに参加させてくれないかというところも、意外にそういうコミ協の会議になってくると、地域の方からの要望を、地域教育コーディネーターの方が、まとめ役というか、お話を聞く役をして、そして学校側に持ってくるなんていう場合も増えています。そういう中で、お仕事が増えてきているのかと思います。

それから、学校の教育活動の中で、例えば地域を題材とした環境活動というのが、どこの学校も増えてきていますが、地域の愛着を育むというねらいもあるのですけど、そういった地域とかかわった授業というのが増えていく中で、地域教育コーディネーターのお仕事がどんどん増えてきているというのはあると思います。

先ほど話しがあった、地域に周知されているのかというところは、それは、本当に学校によると思います。今ほどお話しした３分の２の学校は、自動的にコミ協のなんとか部会、児童部会とか、そういうところに自動的に入って、地域ではそれなりに顔になっていきます。だから、地域によって全然実態も違ってきているのではないかと思います。

（鶴巻委員）

自動的に教育文化部の委員になっておりますので、その通りだと思います。

（渡邊委員）

ちょっと聞きますけれど。地域のコーディネーター、学校とのことを一生懸命進めてやっていらっしゃるのですけど、コーディネーターによっては、得手不得手があるのかどうか分かりませんが、コーディネーターニュースを出していらっしゃるところが多くて、そう聞いているのですが、私のところも結構出ているのですよ。ところが、中学校からあまり来てないのですよね。私が知っている範囲では。そうすると、どうも予算なのか、個人の資質なのか、あるいは活動内容が乏しいのか、いろいろあると思うのですが、そのへんのばらつきが多いと、やはり少ないところは、地域に対する周知が一般の人には、分かってないのではないかなというところはあるので、そのへんは、年何回そういうニュースレターを出してくださいよという指導はされていらっしゃるのでしょうか。

（地域教育推進課長）

回数では課していません。ただ、そのコーディネーターの執務の中には、広報活動というのが必ず入っていますし、研修の中でも分かりやすいお便りを作るにはということは、研修していますので、出していないというところは、多分無いとは思います。お便りの形になったり、学校の掲示であったり、そういうところで発信していると考えています。

（雲尾議長）

発行費というのは確保されているのですか。コーディネーター通信の発行費というのは、全体の中に入っている。

（地域教育推進課長）

需用費が配当されますので、その中から行っていただいています。

（伊井委員）

私が認識不足だったかもしれません。私が公民館の協力員をやったのがもう４年くらい前です。その頃、たしか公民館に来ていただいて、それで協力員の会議に出てもらったことが、たしか１回だけありました。けれども、今回いろいろ聞いてみたら、コーディネーターというのを知っている人が、あまりいないのですね。知っている人は知っているのですが、一般の人は知らない。回覧が回っても、みんなサッカーのところは見てもほかのところは見ないかもしれないし、あんまり関心がないというのが現状ではないでしょうか。

ふれあいスクールも同じだと思うのですね。参加している人はみんな関心があって行きますが、ほ

かの人は、声をかけられてもなかなか参加しない。そういう状況なのではないのですかね。

私の認識不足かもしれませんが、すみません、そういうことです。

（雲尾議長）

ありがとうございます。

（神林委員）

そうだと思います。私の地域も、小学校のニュースは頻繁に来ています。中学校は来ません。年に１回あればいいくらいだと思います。ただ、子どもさんが小中学校に行っている親御さんたちは、コーディネーターがいるということはちゃんと分かっています。コーディネーターが学校にいるということを経験している人たちは分かっていますけど、私たちの年代の人たちは、ニュースなんか来ても流していて見ないですよね。回覧なんて、重要なこと以外。だから、コーディネーターがいるということを知らない人が多いと思います。

でも、すごく忙しくなっているということも。小学校行っていますので。小学校の読みボランティアの方でも教育コーディネーターの人も、自分でも自身も読んでくれている、担当してくれているもので、すごく忙しいというのは分かります。最近、とみに忙しい。学校によってはいろいろなコーディネーターがいるというのも分かります。

（地域教育推進課長）

周知については、区だよりにも載せているので、多分目にはとまっているのではないかと思うのですが、ただ、その学校はどうなのだということについては、なかなか思い通りにいかないという現状があるのかもしれません。広報活動というのは、今後大事になっていくし、やはりボランティアの裾野を広げていったり、いろいろな特技のある方から、学校の教育活動にかかわっていただくということが大事だと思いますので、引き続き広報活動は続けていかなければならないと考えています。

それからふれあいスクールのボランティアの件について、伊井委員からも話がありましたけれども、本当に、子どもから元気をもらっています、それはボランティアからの感想で一番多いところなのです。参加されている、かかわってくださる方は、子どもと接して楽しいと言うのですけれども、なかなか一般的に募集しても、そういう人が集まってこなかったり、また、一番いいのは、一緒に来てやらないかといって、一緒に来てやって、良かったよねといって帰っていくのが一番。それが仲間を広げて行くところなのだそうですけども、１回かかわってしまうと次の人が見つからなくて抜けられないという現状もどうもあるのです。したがいまして、かかわっていただける方をどう広げていくかというのがこれからの課題になっていくのかな思います。

その中で、学びの循環になったから、みんな来て、子どもとかかわっていこうという働きかけをしていただくようになるのが大事だと思うのですけども、どのようにしたら楽しみにして来ていただけるかということを考えていかなければならないし、自分にとってもプラスになるのだ、学びになるのだ、一緒になって、例えばものづくりをするにしても、新しい発見があるのだということは、イベントやそういったプログラムを通しながら働きかけていかなければならないなと思います。

（横坂委員）

ボランティアが減っているという件なのですけれども、どうやったらしてもらえるか、どうやったら来てくれるかという視点からすると、増えない気がするのですね。行って得して帰ってくれるというか、行ってよかった、行かないと損するよくらいな。行ってもう出られないとかいうのでは、やはり先細りだと思うのですよ。行っていいことがあるという視点から、まず企画して、案内するということを。そこを審議してというか、考えて、それがどういう仕掛けかはあれですけれども。今、私は20代、30代の人たちと過ごしていることが多いので、その人たちが行くということは、どういうことなのだろうと思うと、お出でって言って引っ張っても行かないですよね。子どもたちのためと言っても、毎日子どもたちのことで、自分の子どもで苦労している人が、またたくさんの子どものところに行ってボランティアするかというと、預けられるものなら預けたいみたいな気持ちになるかもしれないですよね。預けるにしても何しても、行ったら親にもいいことがあった。あそこに行くと面白いとかということを考えて企画しない限り、この論議は、毎年やっても、毎年釣れば。釣るというかやら

せようと思えば思うほど去って行くみたいな気が。

実力は、本当、若い人たち、すごく持っているのですよ。アイディア力とか情報収集に関しては、本当に驚くほどの力を持っている人がいっぱいいますので、その世代を考えてどうするかという視点で変えていかないと、大変のような気がします。これは私の個人的な意見ですけれども。

先ほど言っていたコーディネーターの方のお話ですけど、私は、公民館とコミ協、両方同時にかかわっているときに、年々お仕事が増えるのを目の前で見ていたのですけれども。こんなことも、こんなことも、この役員も。今年、具体的に言うと、西っ子ふゆまつりというのがやられているのですけども、今年小針中学校コーディネーターの方が、学生たちを、中学生を連れて来ていました。え、これもって。休みの日にって。そういうふうに、今までは先生が連れて来ていたのが、コーディネーターに代わっていて、びっくりしたのですけど。また増えたみたいな。やはり増えていますよね。ちょっと違うかなという感じしながら見ていました。以上です。

（雲尾議長）

ありがとうございます。

（地域教育推進課長）

先ほどの、ボランティアをいかにして呼ぶかというあたりで、本当にいい意見をいただいたと思っています。魅力的な活動であるかどうかということは、これからやはり精査していかなければならないと思うのですが、今、運営主任にお願いしているのは、来たけれども、何もしないで帰って行ったということがないようにしてくださいね、と言っています。来たら必ず最後ミーティングやって今日のこれが良かったよというお話をするとか、子どもの話題で少し盛り上がって振り返りをして帰って行くとか。一番困るのは、行ったけれども、何の役も与えられないで、何をしていいか分からなくて帰りましたということになると、必ず次はボランティアに来てもらえなくなるというのは分かりますから、来たならあなたの役割はこうですよ、ということをお話して、みんなで最後ミーティングして今日の子どもたちの様子を話して、何か楽しかったね、また来ようねという、そんな雰囲気にして帰っていただけるといいなということは研修の中では伝えていこうと思っております。ありがとうございました。

（雲尾議長）

そのほかいかがでございましょうか。

そうしますと、３ページの職務要件、地域教育コーディネーターの職務要件を明確にしたいという、具体的にはどういうことになりますかね。ここが分かりにくいのですけども。

（地域教育推進課長）

今、４つの職務というのがあります。１つはネットワークづくり。それからもう１つはボランティアとの協働参画。３つ目は広報活動、４つ目はその他なのですけれども、ここが曖昧になっていくと、例えば、ボランティアのお礼状って誰が書くのという話題になったことがあるのですが、これはコーディネーターの仕事ではないですよね。けれども、それがいつかどこかでコーディネーターが書くことになっているところもあるのですね。そう考えてくると、要件というのは、きちんと明確にガイドラインを作っていかないと、これもあなたがやれるからということでどんどん仕事が増えて行くことがあるりますので、要件を明確にするという文言をつけたということになります。

（雲尾議長）

活動を制限するというよりは、軽減化を図るということですかね。

（地域教育推進課長）

そうですね、こういう要件でこの仕事をしてもらっているのですよ、ということをきちんとお伝えしていくということで、今担っているものについては、どちらの役割なのでしょうかということを、きちんと明確化していくということになります。

（雲尾議長）

ただ、あまり決まりを作ると、コーディネーターもやりにくくはなるかと思いますので。

文章でいいますと、５ページの下から２行目。企業や大学等が講師となったりという。企業の人材

とか大学とかいう、教員なり学生なり、そういったようなことですよね。何か今後、補っていただければいいかなと思います。

ふれあいスクールはありませんけど、今聞いていて、よくお話を聞くのは、例えば関屋公民館では卓友会というサークルがあって、関屋中卓球部と毎年、卓球大会の交流をしていて、技術指導もしているという。つまり大人が、かなりの高齢の方々が、自分のしたいことで本気で子どもたちと対戦するような形でね。ですから子どものためにやるだけのボランティアではなくて、来たら子どものために何かするのではなくて、自分たちのやりたいことを本気で子どもたちとやってもらう。イベント頼りになりますけども。そういったようなことでやってもらうということ自体は、来る方もやる気を引き出すことになるかと思いますので。そういったようなことも、学校の方でですね、やれる場所としてふれあいスクールは考えていただけるといいかなと思います。

あと、何かございましょうか。

（神林委員）

ふれあいスクールのことなのですけど。ここの４ページの学習アドバイザー、ありますよね。これは、資格とか何かあるのでしょうか。

（地域教育推進課長）

資格を必要としています。教員免許をお持ちの地域の方、または、これから先生を目指す大学の学生です。

（神林委員）

分かりました。

（雲尾議長）

そのほか、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

ありがとうございました。では、続きまして、社会教育施設を舞台にした循環型生涯学習につきましてお願いいたします。

（生涯学習センター所長）

生涯学習センターの方からご説明させていただきます。当センターの事業としては、№３と№４、生涯学習センターボランティア事業とボランティアバンクの運営という形でございます。まず７ページをご覧ください。これは、学びの循環のつなぎ役、実践者であるボランティアを養成、支援する事業でございます。

まず学習情報の収集・提供・相談事業ですけれども、これにつきましては、生涯学習センターのボランティアによる学習相談事業。パソコン講習事業などでございます。

次の生涯学習ボランティア育成支援事業ですが、生涯学習センターで、さまざまな事業を実践している「Ｌの会」、「あそぶんジャー」などのボランティアを育成するとともに、次に説明いたしますボランティアバンクの登録・活用を進める事業でございます。取組経過につきましては記載の通りでございます。

８ページをご覧ください。31 期の社会教育委員の皆様からは、講座・ボランティアバンク事業による人材の育成や活動支援、それからボランティアや専門学校との共催事業などが定着していることなどについて評価をいただいております。提言・課題といたしましては、やはりボランティアの高齢化が進むなど、参加者が増えないことから、将来的に学びの循環が止まってしまうのではないかとか、そのためには情報発信の強化による新規ボランティアの発掘が必要だと指摘されています。

今年度も記載の事業を引き続き行っていますが、養成講座の内容を見直して、参加しやすいように 10 回の講座だったものを６回にするとともに、グループワークや情報交換の時間を増やして、ボランティアはこんなに楽しいよと、ボランティア同志の交流が深まるように工夫いたしました。ボランティアとの共催事業にも引き続き取り組んで行くとともに、「Ｌの会」の会報をフェイスブックに載せるなどして、情報発信も強化しております。

９ページになりますけれども、担当課が考える課題としては、新規ボランティアの、先ほどからの話にもございますが、まだまだ増やす必要があることなどが挙げられております。

続きまして10ページをご覧ください。ボランティアバンクの運営になります。ボランティアバンクは、平成19年の２月から登録を開始いたしました。登録者は平成18年度末の時点では435人でしたが、約10年経過後の平成29年２月末では、約３倍近くの1、150人の方に登録していただいております。派遣数につきましても、平成19年度は72人でしたけれども、平成27年度は464人、平成28年度は現在361人と、５、６倍の規模に増えております。平成27年度からより一層活躍していく場を創出する必要があるということで、ボランティアバンク登録者が講師となる自主企画講座を行っております。

11ページをご覧ください。２の提言・課題ということで、社会教育委員の皆様からいただいたものですけれども、やはり活躍の場がないこと。それから依頼に偏りが生じていることは課題としてあげられており、情報発信による新規ボランティアの発掘等が必要だと言われております。

平成28年度の状況ですが、活動実態の把握と２年更新で登録していたものを、３年更新に切り替えるために、一斉更新作業を行いました。ある多くの会員がいる団体が、多忙ということで登録の更新を辞退したこともあって、登録人数が若干減るとともに、派遣件数も残念ながら若干減ってしまいました。

活躍の場を創出して、依頼の契機とするためには、平成28年度、実は自主企画講座を２講座増やして、５講座実施しました。さらに情報発信を強化するために、フェイスブックを活用するとともに、利用が見込まれる施設・団体のボランティアバンクのＰＲを引き続き行ってまいります。

最後に担当課が抱える課題ですが、今後もボランティアの活躍の場の創出・発掘が必要であり、そのためには情報発信の強化が必要であると考えております。また、社会福祉協議会や学校など、ボランティア実施団体との連携をさらに強化していくことも重要であると認識しております。生涯学習センターからは以上でございます。

（雲尾議長）

では次に図書館。

（中央図書館サービス課長）

それでは次に、図書館ボランティアについてご説明いたします。図書館では図書館ビジョンの４つの柱の１つとして、市民参画と協働を推進する「パートナーシップ型図書館」をあげております。図書館の運営においては市民との協働を進め、市民とともに成長する図書館を目指します、としています。

取組経過については、こちらに記載の通りです。31期の建議のところですが、この中で、市民との協働の中で、新しいタイプの協働が始まっているということで、この下に例を挙げております。例えば、市民と協働したビブリオバトルの開催。それから図書館を支援する市民、友の会などが運営するイベント。それから地域のコミ協が行うミニライブラリーへの参加。中心図書館が資料の提供を行っております。それから、団体貸出制度を活用した企業の非営利活動への資料提供。例えば喫茶店とかお米屋さんとかカーショップなどに、図書館から団体貸出をしているというものです。こういった取組が始まっています。

次13ページをお願いいたします。提言・課題として２のところにありますが、ボランティアに対する依頼に偏りが生じている。また、社会教育施設による情報発信の強化及びそれによる新規ボランティアの発掘等が必要という提言をいただいております。ボランティアの依頼については、各中心館とも連携しまして、偏りのないように進めていきたいと思っております。それから、情報発信や新規ボランティアの発掘等についても、今後引き続き取り組んでいきますが、新年度におきましては、図書館ボランティア講座というものを開催して、読み聞かせだけでなく、いろいろな図書館のボランティアにつながるような講座にしたいと考えております。

それから、この前にありました、生涯学習センターのボランティアバンクと連携しまして、図書館のボランティアにも協力をお願いして、ボランティアバンクに登録していただいて、広く市民の方に知っていただくようにしていきたいと考えております。課題としては、ボランティア活動の拡大を図るに当たって、既存の団体との連携だけではなくて、今後民間とどのように結びつけていくかという

ことが課題と思っております。以上です。

（雲尾議長）

では公民館お願いします。

（中央公民館長）

公民館です。公民館からは、№６、№７、№８の３つがございます。

まず、№６の公民館ボランティアですが、公民館では、生涯にわたって学習機会を提供していきたいということで、それに合わせて、市民の目線ですとか、あるいは市民の自発的な活動を期待しております。15ページに、現在の状況ですが、25の公民館で年間約700くらいの講座があります。その全てではありませんけれども、かなりのところで前年度の受講者、あるいは、関係している方々のご意見を聞いて、できれば企画を出していただきたい、あるいは協力してもらいたい。または、公民館の関係者だけではなくて、地域のコミ協の皆さん、それから地域教育コーディネーターの皆さん、また、ＰＴＡの皆さん、ほか、いろいろな地域団体の方々からも事業や講座に協力してもらいたいというような形で呼び掛けております。その方々から、公民館の企画委員や運営委員として参加してもらって、実際の講座を実施する際に協力してもらうということになります。協力内容については、受付であったり、机・イスを並べたり、あるいは事業の報告を作ったり、また広報したりというように、多岐にわたっています。

課題としては、新しい方がやはり少ないということです。どうしても前年受けた方々がまた受けたり、あるいは、協力をしてくれる方も同じような方が受けていて、新陳代謝があまりないということがあります。また、新しい課題を、私ども公民館としても捉えていきたいと思っています。例えばＩＴですとか、まちづくりですとか、そういうものに対応するボランティアの育成・発掘がなかなか進んでいないので、その部分が不足をしているということはあると思っています。

№７ですが、公民館における講座受講者による企画委員・運営委員及び自主サークル化です。前の６と関連しているのですけれども、公民館でいろいろな事業を展開して、いろいろな団体やサークルを作っていきたいということなのですが、公民館を利用する団体が年々減っています。平成24年度は4、652、それが、4、365、4、149、平成27年度は3、808に減少しています。ただ、これは公民館で活動する団体が少なくなっていることであって、公民館がコミセン化していくとか、あるいは、昨年できた西区の内野にできましたように、西地区公民館のすぐ近くに、うちのまちづくりセンターができると、そちらの方に活動拠点を移していくということで、必ずしも市民の団体が減っていくというわけではないのです。ただ、少しずつ減っていく現象はあります。

公民館利用者については、24年度が84万6、000人ほどでしたが、27年度については73万7、000人ほどで、少し下げ止まり傾向が見られています。こういうふうな方々の中から、公民館にサークルを作ってもらいたいと、私ども呼び掛けています。既存のサークルについては、高齢化が進んでいたり、あるいは役員のなり手がいなかったりで、すこしずつ減っているのですが、新しい団体を作っていきたいと思っています。

先ほど言いましたように、約700ほど講座を開いておりますので、実際にその内、40ほどのサークルが年間できています。どういうものかと言いますと、家庭教育学級のゆりかご、それから若者講座のユース、それから高齢者を対象にした農業活動のセカンドライフ農業体験などから、サークルができてきています。そういう方々から、また新しい講座を開くときに協力してもらいたいと考えていますし、また、会員の減少に歯止めをかけてもらいたいと思っています。

それから、サークルはかなりあるのですけれども、サークル間同士の情報共有といいますか、仲間作りが少し足りないなと考えていますので、地域や世代を超えたネットワークを作るというようなことも必要なのだろうなと、担当課としては課題を考えています。

（雲尾議長）

ただ今の社会教育施設の循環型生涯学習ということにつきまして、お気付きの点やご質問等ありましたらお願いいたします。３から７の部分です。

（横坂委員）

６のところなのですけれども。次の世代が育つというときには、公民館がどれだけ、公民館長、それからスタッフですね、職員の方が、リーダーを大切に思っているか。それが育てる鍵のような気がします。長年いて。好きなことをしたいのを大事にするのではなくて、やはり大事なことをしている人たちに対しては、寄り添って、協力して、リーダーを育てていく。育った人たちを見ていて。このあいだ、子ども食堂もそうなのですけど、あれは、西区の郷さんですとか、私、彼女も一緒だったのですけど、小学生期の講座だったと思うのですね。最初に参加して、母親として参加して、その次企画に入って、そのあと、ずっと公民館みたいな。その時の職員の方たちの対応、対応というか、とても良かったのですね。それで、私たち育てられちゃって、離れられなくなったというのが事実なのです。

ですから、私たちは育ててもらったねというのは、具体的に言うと、館長や職員の方が、すごく大切にしてくれて、寄り添ってくださって、頑張れと言ってくれたことが、私たちをそこに居続けさせてくれた鍵だったものですから、すごく感謝しています。

今、じゃあどうかというと、なかなか難しいところも具体的にあるようです。ですから、そこらへんはこちらが考えていただいて、各公民館がきちっと次の世代の人たちを大切にして寄り添っているかどうかという視点で見ていただきたいなと思います。以上です。

（雲尾議長）

ありがとうございます。

（中央公民館長）

先ほどの、サークルが高齢化していってというのがあって、いよいよどん詰まりの部分があるのだろうなと思います。今活動している世代がずっと 20 年、30 年経って活動してきていて、その方々はもう活動しきれなくなってきている。それで新しい活動してくれる人たち、あるいはサークルを、私ども促していきたいと思っています。

新しいというのが、今までのようなものではなくて、今、社会的な課題になっている、貧困や、あるいはＩＴ、あるいはまちづくりですとか、そういうものをどれくらい我々で支援できるかということを考えています。その中心になった事業が次に説明しますコミュニティコーディネーター講座なのですけれども、そういう方々と私どもも一緒になってやっていきたいと思っています。

確かに、昭和 50 年代に公民館で、家庭教育学級を始めて、そのまだ若いお母さんだった方々が、先ほどの例にあったように、その後のまちづくりの中心になっていたり、自治協の役員やっていたりという方になりますので、そういう意味でも人材育成につながっていくと考えています。

今、地域で社会的な課題、地域の課題にトライしていこうとしている人たちをできるだけ見つけて支援していきたいと。それをサークル化していって、つなげていきたいと思っていますが、なかなか、以前と比べて人も予算も少ない中で、コミセンができたり、その他にも似ている施設がたくさんできていたり、公民館だけでは捉え切れていないのですね。いろいろなところでいろいろな方々が活動されているので、それをどういうふうにして今後まとめていくというか、ネットワーク化していくかということが難しいなと思っています。

昔であれば、公民館にみんな来ていたのですが、今はたくさんの施設ができていて、特にコミセンが公民館の数と同じくらいあるのですね。実際そこで活動している方々もたくさんいらっしゃるわけです。この近くで言えば、市民活動支援センターもあります。そこは駐車場が無料なので、そっちへ行ってしまうというようなこともあって、公民館だけで全部が捉えられていないなと思います。

ただ、従来から、学校や地域と一番結びつきが強いのは公民館だと思っていますので、それは十分に認識して、今後も支援活動をしていきたいと思っております。

（横坂委員）

生涯学習は、公民館だと思います。一市民としてですね。そこには、職員がいます。地域の人は、地域で育つ部分を担当していただくことはできても、やはりそこに専門家がいる、専門を求められる場所があるというのは、市民としては本当に大事な場所なのですね、公民館は。そこが温かいというのは、人を育てるし、時代が変わっても人間てそれほどハートは変わらないので、うれしいとか、温

かいということに対して、すごく敏感だと思うのですね。公民館に行ったら、ちょっとこっち来て話していきなさいということだとか、そういうことが普通の生活の中で聞こえてくるものですから、今回は全然話も聞いてもらえなかったとか。

マイナスでいうならば、こっちの企画は全然だめで、仕事だけ任せられたということがあったりとか。時代が進んでいくのと同時に人間として変わらない温かさとか、寄り添う気持ちとかというのは、大事にしていただきたいな。生涯教育は、私個人の意見かもしれないですけど、あくまでも公民館に求めたいと思います。よろしくお願いいたします。

（雲尾議長）

そのほかいかがでしょうか。

（伊井委員）

№.４の、ページでは 11 ページになります。ボランティアバンクの登録者数についてです。私も登録していますが、登録して何をやっているかというと、囲碁でデイサービスに行っております。１ヶ月に１回ですからたいしたことはありませんが、私の感ずるところでは、登録しても行くところがなければ、登録する価値がないし登録もしてくれない。じゃあどうしたらいいかということで、一例として、鳥屋野地区公民館に新しく落語のサークルができました。どこかで落語を演じたいが、依頼もないし、だまっていても誰も来てくれないので、営業活動をしていかないとだめなのです。落語をする場所を探さないと。ボランティアバンクも同じで、ただ登録で場所がないのだ、ないのだと言うだけではなくて、誰かが出ていって、そういう場所を探さないといけないような感じがしますね。

厳しいような話ですけれども、私も今、落語で一生懸命営業活動やっています。営業活動に行くと、皆さん「じゃあ来てください」というので、地域の茶の間とか老人クラブとかに出られます。参加できる場所を積極的に探すボランティアを、それこそ、そのボランティアを募集したほうがいいのではないでしょうか。

もう１つ、営業活動ということでいうと、企業にもう少し働きかけたらいかがでしょうか。今の企業にいる人たちというのは、恐らく 65 歳とか 70 歳くらいまで働くのではないかと思うのですが、企業から退職したあとどうなるかというのを宣伝する何かを作ったらいかがなものですか。持論で申し訳ありませんけれど、企業も損はしないと思うのですね。特に私がいつも言うのは、社会教育主事講習 B への参加です。ああいう講習に参加したら、企業の人材育成にもなるし、ボランティアへの参加も出やすくなってくるのではないかと思います。私の場合は 64 歳で仕事を辞めたのですが、60 歳くらいのときから、市の男性クッキング教室に参加していました。私の持論ばかり言って申し訳ありませんが。そんなことを考えました。

（生涯学習センター所長）

ご意見ありがとうございました。生涯学習センターです。おっしゃる通り活躍の場がないとやはりボランティアのモチベーションは下がってくるのですね。活躍の場があって、そこで楽しかったというようなことがあると、また次につながるなという印象を私も持っています。

活躍の場として一番多いのは、学校であり、福祉関係なのです。ここにも記載させていただいたのですが、例えば福祉施設の関係で、ボランティアがもしかしたら必要かなと思われるところについては、どういうやり方がいいのかは分かりませんが、何らかの形で個別にアプローチすることも考えております。

それからもう１つは、声がかかりにくいような分野もボランティアの中にはあるのですね。そういった分野についても今回、ボランティアの自主企画講座ということで、声がかかりにくい団体にも声をかけ、手を挙げていただいて、事業として生涯学習センターが行いました。役割としては、生涯学習センターが場所を提供して、ＰＲを生涯学習センターが行って、実践はボランティアということで行いました。

応募者は、蓋を開けてみればなかなかたくさんの方々に応募いただきまして、例えば吹き矢のサークルがあるのですが、なかなか会員も増えないという状況にありました。私も何回かのぞいたのですが、公民館の文化祭のときに吹き矢の実演やるのですけども、ほとんどお客さんいないのです。とこ

ろが、今回について言えば、２回行って、両方とも定員を越えるような参加者がいらっしゃったのですね。話を聞いたら、楽しいのでサークルに入りたいという声もいくつかいただきました。やはりボランティアが必要と思われる団体に個別にアプローチするのと合わせて、同時並行で自主企画講座を行っていくことが大事なのかなと、今のところ考えております。

それから会社関係の部分ですよね。それも課題としては認識しております。ちょっと違うのかもしれませんけども、いろいろなアプローチの仕方がある中で、ちょっと会社とは違うのですが、まずは専門学校との連携をさらに深めていく中で、学びの循環の歯車を、もうワンステージ上げたいと考えております。

今のところ、新潟高度情報専門学校のボランティアによるパソコン講座を行っているだけなのですが、お話する中で、やはり学生さんにとっても非常にいい経験だし、教わる方たちにとっても、自分の孫みたいな方から教わるというのは、非常に楽しい。そういう意味合いの中で、いい学びの循環だなと認識していますので、ボランティアの部分、専門学校の部分についても、拡充することを考えています。

企業関係については、どんなアプローチがいいのか、例えば商工会議所に行ってピーアールするとか、そういった選択肢もあるなと考えておりますが、もう少し具体的な内容については詰めていきたいと思っております。以上でございます。

（雲尾議長）

そのほか、いかがでしょうか。

先週、ちょうど生涯学習推進センターに行ったときに所長とお話したのですが、２月の社会教育主事講習、今回も20名定員のところ23名の方、少し余分に応募があったので、その方々を入れて受講されたという話で、伊井委員のおっしゃるように、企業の方もその頃、定年直前でしたら、年金も余っているし、そこで受講してもらうというのも１つの方法かとは思います。ただ、ずっとビデオ受講なので大変つらいとおっしゃっていました。ありがとうございました。

そのほか、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

では、８番のところを、また五十嵐館長お願いします。

（中央公民館長）

公民館です。では、８番の地域を舞台にした循環型生涯学習です。今までは、社会教育施設を会場にしたものでしたけれども、実際に公民館活動は、公民館の中だけではなくて、公民館改革宣言で、地域に出かけ、地域の人たちと一緒になって、地域課題に取り組んでいこうということを旗印に活動しておりますので、その中心的な事業が、コミュニティ・コーディネーター育成講座になります。

この事業については、平成21年度にスタートいたしまして、現在までも続いております。今年度は各区の基幹公民館を中心に11の講座が実施されております。講座内容については、豊栄地区公民館ではコミュニティビジネス。新津地区公民館では秋葉ｄｅ夜会、これは若者講座です。曽野木地区公民館では、プロから学ぶ広報紙の作り方。西地区公民館では、うちの発掘プロジェクトなどをやっています。そういう事業をやっておりますが、いくつかやはり課題もあります。

私どもといたしましては、できるだけ、地域課題に取り組む人たちと一緒になってやっていきたいのですけれども、地域とうまくすり合わせができないケースがあったりして、地域としては、例えば自治協ですとかコミ協への役員の研修をしたい、あるいは、その役員の担い手をＣＣ講座から供給をしてもらいたいという要望があります。もちろん、それも１つの目的ではあるのですけれども、それと同時に私どもといたしましては、自分たちで地域課題に取り組む人材、あるいはサークルを育成していきたいと考えております。

具体的な動きとして、さっき言いましたように、コミュニティビジネスみたいなものを始めようということで、単年度ではできませんので、３ヵ年くらいの計画で、26、27、28くらいで、実際にいろいろなセミナーをやって、29年度くらいから実現に向けて、実際に１歩を踏み出していこうというような取組みもあります。

そのように徐々にではありますが、まだまだ道半ばということで、今は、地域課題の解決に一緒に

なって取り組もうよと。一緒に歩いていこうよ、向かっていこうよということなのかなと思っています。こういう課題が解決したよとか、こういうふうにうまくいったよというようなことは、一長一短にはできないのですが、私どもといたしましては、できるだけ地域のニーズに則した形で、少しでも活動している人たちと一緒になって地域課題の解決に取り組んでいきたいと考えています。以上です。

（雲尾議長）

ありがとうございました。では、地域を舞台にした循環型生涯学習につきまして、ご質問、ご意見等ありましたらお願いいたします。

（伊井委員）

ちょっといいですか。ここの 19 ページのところに学社民融合支援主事の、公民館職員を学社民融合支援主事に指名するとなっていて、育成講座をやるのですが、これは公民館の職員だけですか。ほかの人にも講座を開放しているのですか。お聞かせください。

（中央公民館長）

学社民融合支援主事は、各地区公民館、また中央公民館で 25 ありますが、そこの職員をあてています。公民館によって、地域を割り当てたり、学校を割り当てたりしていて、数はそれぞれ違うのですが、学社民融合支援主事が中心になって地域の学校と公民館・社会教育施設を結んで、講座を組んだり、事業を実施していくということになっています。

（伊井委員）

すみません、私が勘違いしていました。分かりました。

（雲尾議長）

そのほか、いかがでしょうか。

（鶴巻委員）

最初に、私は地域教育コーディネーターなのですけれども、最近コミュニティコーディネーターと混同されている方もいらっしゃいます。私たちは学校に席を置いておりますが、コミュニティコーディネーターという方たちは、いわゆる公民館を基盤に、その養成講座を受けた方が、コミュニティコーディネーターになるということでしょうか。

（中央公民館長）

コミュニティコーディネーターというのは、私も最初誤解していた部分があって、コミュニティコーディネーターというのは、地域教育コーディネーターの公民館というか、社会教育版なのかなと思いました。そういう名刺を持って、いろいろな地域団体や学校へ行って、結びつけて、事業を展開していく役割なのかなと思っていたのですね。もちろん、１つには、そういった役割もあるのですが、ただ、コミュニティコーディネーターという名刺はございません。資格もありません。講座があるだけです。その講座を受けた方で、主に２つですね。２つの役割があります。

１つは、地域にある自治協とかコミ協とかＰＴＡとか、いろいろな社会福祉関係の団体ですとか、そういう団体から受講してもらって、そちらに戻って、その役員を担ってもらうというようなことが１つです。もう１つは、そういう既存の組織ではなくて、自分たちで新しい組織、例えばコミュニティビジネスをやるためにＮＰＯを立ち上げるとか、そういうものを立ち上げて、自分たちが抱えている課題に取り組んでいこうという、２つの役割があります。この講座は、内容によって研修型の講座もあれば、人材育成型の講座もあったり。あるいは単年度で終わるとか、単発で１回こっきりの講座で終わるケースもあれば、年間４回、５回やって、それを２年、３年続けて１つの成果、例えばＮＰＯ法人を作るとかというような、いろいろな形があるのですね。それは各区、各地区公民館によって内容が違います。

（鶴巻委員）

では、私たちは学校を基盤にして、地域教育コーディネーターという名刺を持って、地域に出向いて、学校と地域をつなぎますけれども、このコミュニティコーディネーターという方は、こういう名刺があって、公民館を基盤にして地域でお仕事するとか、そういうことではないということですね。

（中央公民館長）

そうですね。そういうものでは、今のところないです。

（鶴巻委員）

20ページの一番最後の文言に、今後、連携出来ていない学校や地域教育コーディネーター、コミュニティ協議会へ働きかけ、事業実施の実現を進めていくということになっているのですけれど、具体的にはどういうことなのでしょうか。私たちに働きかけてということですか。

（中央公民館長）

課題が２つくらいあるのです。１つは、やはり、その自治協とか学校によって、かなり温度差があります。例えば中央公民館のエリアであれば、４つくらいの旧小学校単位のコミ協がありますけれども、全てと連携しているわけではないです。学校も同様です。連携しているところもあれば、連携が弱いところもあります。それは、学校側の考えもあるでしょうし、地域教育コーディネーターのあり方、その学校におけるあり方というものもあるので、一概にどれがいいとは言えないのですけれども。

ただ、私どもとしては、基本的にはメニューは揃えていきたいと思っているのです。要は、先ほど言ったように、地域と学校を結びつける担当の公民館の職員がいますよと。とりあえず全部の地域、コミ協や、全部の学校を回って、こういうことがやれるのですけれど、一緒になってやりませんかというように提案をして、一緒になって連携して協働してやっていこうと思っています。

それから、もう１つの課題としては、課題自体が、そういうところだけではなくて、学校とか地域とか、ある組織だけではなくて、もっと別のところにあるのかなと思うのですね。例えば、いわゆる貧困格差の問題に対して、現在公民館としては全く稼働していないわけですよ。今の課題って、そういうものではないですか。例えば婚活なんかもそうだと思います。今年やってみたのですけど、あれって結構大きい課題だと、私ども思っているのです。そういうものに、少しでも公民館は役に立たないといけないなと思って、婚活なんかも、今、国の補助事業でやっていますし、小さいものでは、ＣＣ講座の中で、これは横越地区公民館ですけれども、横越コミ協と一緒になって、１回こっきりの婚活もやったりしています。

ですから、今まで見過ごしていたような、というか、組織でないところとどうやって連携をしていくのかというものも、もう１つの課題としてはあるのかなと思っています。

（雲尾議長）

最後の、事業実施の実現を進めるというのは、何かへんな言葉になっているのですけど。そうすると、地域に必要とされる事業の実現を図るといったようなことですね。

（中央公民館長）

そうですね。

（雲尾議長）

ありがとうございました。そのほか、いかがでございましょうか。よろしいでしょうか。

ありがとうございました。では、（２）建議「『学びの循環』による人づくり」関係事業についてについての説明を終わります。

（３）建議策定スケジュール及びグループ分けについて

（雲尾議長）

事務局より説明をお願いいたします。

（生涯学習センター主事）

まず、資料３をご覧ください。第32期社会教育委員会議、建議「『学びの循環』による人づくり」策定スケジュール（案）です。こちらに、平成30年３月に建議をまとめていただくまでの、おおまかなスケジュールを提示しております。今日が平成28年度一番最後の第５回目ということで、真ん中の線よりも１つ上のところに書いてあるところになります。来年度、平成29年度に入りまして、だいたい５月頃を予定しておりますが、まずは建議骨子、構成や目次について協議をしていただきます。そのあとで、このスケジュールで概ね問題ないということであれば、このあと、担当のグループに、グループ分けをしていただきまして、学校のグループと、社会教育施設、それから地域の３つのグルー

プにグループ分けをしていただきまして、来年度、第１回目の会議のときにそのグループで検討会をしていただきたいと思っております。

そこで得た意見、こういったことを建議に盛り込みたいといったものをまとめていただいて、７月頃の会議の際に、全体の場で協議をしていただきます。そして、そこで執筆の分担もしていただいて、グループで執筆される部分についてはグループで執筆作業に入っていただきます。そのあと、10 月頃、執筆していただいた草案をまとめまして、全体で内容の確認や方向性の確認をしていただいて、グループ単位で細かな記載内容に漏れがないかなど、そういったところを詰めていただければと思っています。

１月頃の会議で最終案を全体で協議していただいて、修正を加えて、２月、建議として最終的に決定し、３月に教育委員会に提出、というスケジュールで概ね考えております。

スケジュールに問題がないようであれば、資料４をご覧ください。先ほどお話ししましたグループ分けの表になっております。学校を舞台とした循環型生涯学習のグループ。それから、社会教育施設を舞台とした循環型生涯学習のグループ。それから地域を舞台とした循環型生涯学習のグループという３つのグループに分かれていただきたいという案です。

雲尾議長と小川副議長につきましては、どのグループにも属さずに、全体をサポートしていただいて、最終的には全体をまとめる役割をしていただくアドバイザーとしてあります。

事務局も、３つのグループに分かれていただきまして、学校につきましては、地域教育推進課。社会教育施設につきましては、中央公民館、それから中央図書館。地域を舞台にした循環型生涯学習のところでは、生涯学習センターが事務局として入るということで、グループ分けの案にしてあります。事務局からは以上です。

（雲尾議長）

まず、事務局より説明がありました資料３の建議策定スケジュールにつきまして、ご質問やご意見等ありましたらお願いいたします。

これで概ねよろしいでしょうか。ありがとうございました。では、建議作りに当たっては概ね資料のスケジュールで進めたいと思います。

次に、意見交換をするグループ分けを行いたいと思います。資料４にありますように、学校、社会教育施設、地域の３グループのうち、ご希望がありましたらお願いいたします。

（神林委員）

社会教育施設のところでお願いします。

（雲尾議長）

神林委員が、社会教育施設を舞台にした循環型生涯学習ですね。

（渡邊委員）

学校にちょっとかかわっているので、学校のほうが、出来たら。

（雲尾議長）

渡邊委員、学校を舞台にした循環型生涯学習のグループですね。

（伊井委員）

私も公民館にします。

（雲尾議長）

伊井委員、社会教育施設。

（田村委員）

私と齊川委員は、小学校長会それから中学校長会を代表して来ているのですが、やはり学校のところに入ったほうがいいのか、そうではないほうがいいのかというのが、よく分からないのですが。

（雲尾議長）

齊川委員自体は交替されるので、希望を聞いてもいないですよね。

（生涯学習センター次長補佐）

希望をお聞きしているのは、今回、欠席と連絡いただいた本間委員からは、私ＮＰＯにいるので、

地域でもいいけど、学校運営にも関係しているから、学校でもいいけど、人数次第でどちらでもいいですというご意見でしたが、希望は地域グループという意向をおっしゃっていました。

（横坂委員）

そしたら、私は社会教育施設のほうで。

（南雲委員）

私、南雲は学校のほうをお願いします。

（鶴巻委員）

田村委員と同じで、かかわっているところは学校なのですけれども、でも、そのほかに行ったほうがいいのか、それとも自分たちがかかわっているところに行ったほうがいいのか、興味があるところに行ったほうがいいのか、そのあたりはどうなのでしょうか。

（田村委員）

学校を舞台にした循環型生涯学習ということは、学校というところを分からないと、循環型生涯学習をどうやっていこうかということをなかなか言えませんよね。学校とかかわった方がここに入っていたほうがいいのかなと。学校を舞台としたと書いてあるので、そうすると私も学校に入っていたほうがいいのかなという気がします。

（鶴巻委員）

では、私も学校に参加します。いっぱいになっちゃいますね。

（田村委員）

どうしたらいいのかなと。

（伊井委員）

私はどちらでもいいです。いっぱいになるなら、私は地域を舞台にした循環型生涯学習にします。これ、誰もいないから、こっちに移ります。生涯学習センターというのは、どういうことでしたか。

（雲尾議長）

担当が生涯学習センターというだけで、地域を舞台にしたというのはコミュニティコーディネーターとか、そんな話です。

（伊井委員）

この内容ですよね。では、私は地域の方にします。

（田村委員）

希望だけでよろしいですか。希望としては学校に入れていただければ。あとで調整していただければと思います。

（雲尾議長）

希望としては。学校と。

（鶴巻委員）

私も学校になる。でも学校多くなりますよね。

（雲尾委員）

小学校長会もありますからね。

（神林委員）

地域教育コーディネーターは学校だと思います。

（鶴巻委員）

では、学校で。

（渡邊委員）

今、学校が多いですね。では、私は公民館のほうにまいりますか。

（雲尾議長）

渡邊委員は公民館ですか。

（伊井委員）

私は地域の方に行きましたから。

（雲尾議長）
今のところは、小学校長会も入れるとすれば、学校が４名、社会教育施設が３名、地域が２名という感じですかね。
（小川委員）
事務局に質問なのですが、一応、人数のバランスもあって３人ずつという枠が出来ていますけど、これは３人ずついきますよという意味なのか、ある程度ばらつきがあってもいいのか。その他、何かお考えがあれば。
（生涯学習センター所長）
多少のばらつきはあってもいいのかなと思います。その分、人数少ないところについては、雲尾先生と小川先生に厚めにフォローしていただければと、事務局としては考えております。
（小川委員）
結局、そのばらつきがあると、例えば意見交換をしましょうといっても、仮に本間さんがいらっしゃいませんので、地域グループで本間さんと伊井さんとやっていただくとすると、意見交換するにはそれなりに人数がいないと、すぐ煮詰まる時間が、すぐやってくるだろうということも考えられますし、それからスケジュールを見ると、執筆もこのグループで考えてくださいねということになると、そのあたりの兼ね合いも出てくるわけですね。それでお聞きしました。
（雲尾議長）
よろしいでしょうか。ご希望を優先してという形で。
では、齊川委員の交代委員がどなたか分からないので、そこは置いておいて、学校グループは、田村委員、鶴巻委員、南雲委員の３名ですね。そして社会教育施設グループは、神林委員、横坂委員、渡邊委員。そして地域グループは、伊井委員、本間委員という形で。齊川委員の交代委員につきましては、また後日ということでお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

（４）平成２９年度社会教育関係団体補助金にについて
（雲尾議長）
社会教育法第 13 条の規定によりまして、「～地方公共団体が社会教育関係団体に対して補助金を交付する場合には、あらかじめ、～社会教育委員の会議の意見を聴いて行わなければならない。」とあります。これにつきまして、事務局から説明をお願いいたします。
（生涯学習センター所長）
資料５をご覧ください。社会教育関係団体補助金ということでございます。今ほど議長からお話がありましたように、社会教育法第 13 条によって、社会教育関係団体に補助金を交付するに当たって、あらかじめ、社会教育委員の皆様の意見をお聴きすることになっています。お聴きする主旨としましては、本来自由で自主的な活動を行う社会教育団体に、行政が補助金を出すことによって、事業への不当な干渉など加えられることが無いように、社会教育委員の皆様にチェックしていただくということが主旨でございます。
平成 29 年度は、別添の補助金を交付する予定ですが、全て継続の補助金です。４番の西川高砂学級補助金ですけれども、平成 28 年度は、実は西蒲区が担当しておりましたが、来年度から、社会教育関係の補助金ということで、公民館に移管したことに伴って、今回ご意見をお聴きする補助金に加えました。以上で説明を終わります。
（雲尾議長）
ただ今の説明につきまして、ご質問、ご意見等ありましたらお願いいたします。
（横坂委員）
育成協なのですが、金額とか、これはどうだとかいうことではないのですけれども、育成協は、各自治会からもお金が出ていますよね。１戸あたりいくらと。違いましたでしょうか。育成協の予算というのは。
（地域教育推進課長）

自治会からは出ていないです。ただ、協力金という形でいただいているのではないかと思います。

（横坂委員）

協力金ですか。協力金ということで、町内会から、各町内会が集めて、それが入っているというのと、近年コミ協ができて、コミ協と一緒に活動をすると、コミ協活動の補助金から育成協活動を一緒にできるという構造にはなっていますよね。コミ協と組むと、新潟市から、補助金出ますよね。

（鶴巻委員）

地域によって違うのですよ。新潟市の青少年育成協議会なのですけれども、旧新潟市、私、西川なのですけど、それまでは、各町内会費とともに１戸当たり何百円という徴収もありました。でも、合併するに当たり、それが無くなりましたので、今、西川の育成協は、市からの５万1、000円のみなのですよね。それが、今、各中学校区に１個ずつあるのが育成協の団体なので、掛ける市からの補助金は５万1、000円掛ける何十か所かあるのですけど、それがこの金額になっていると思います。

コミ協と何か事業をするに当たって、一緒に何かするときに、コミ協の予算の中から、何か事業をするものの費用としてくることはあると思います。

（雲尾議長）

補助金として、団体が地域活動補助金で申請すると３年間20万ずつもらえるものが、コミ協と組むと５年間かに延びるという、それですかね。

（横坂委員）

催し物に関して出るのですよ。１事業いくらというのを、何本でもというのがあって、育成協が予算が少ないので、コミ協と組んで、コミ協が予算を持ってくるみたいな構造になっているというか。育成協が単体でもらっているだけの活動ではなくなっているわけですよね。

（鶴巻委員）

できないのです。地区によって、各戸からいただいている時代はできました。大きな講演会だったりとか、人形劇呼んだりとかもできましたけれども、今は、それが西川の場合は無いのでできないのですよね。コミ協と一緒に共催という形でやって、地域の子どもたちのために人形劇を呼ぼうとか、ファミリーコンサートやろうとか、そういうことはできますよね。それから、例えばいじめ防止だったりとか、万引き防止だったりというような、啓蒙活動の一環として、ティッシュを配ろうというときのティッシュを作るとか、そういう予算も無いので、コミ協との協働ということでやっています。

本当に５万円くらいだと１年間の活動の中で何ができるかというと、それこそ広報紙を作って、こんなことやっていますよというくらいしかできない。最近はそれもできないので、コミ協にお願いしたりもしていますけれども。

（横坂委員）

このお金が、どういうふうというか、ここから出ていますよね。それはすごく少ない。少なくて活動ができないので、実際の育成協の仕事はそういう形で運営されているということを、世の中はあまり分かっていないというか。

私自身がコミ協と育成協を同時にやったときに、お金が無いから、コミ協と一緒にしてやろうというくらいのことしかできなかったことを思い出して。このお金は、どういう形で育成協にどのくらい入っているのか聞きたかったのです。ごちゃごちゃしてすみません。

（鶴巻委員）

それは、育成協担当課が。

（地域教育推進課長）

今、お話されたように、これはあくまでも任意団体ですから、これの活動の補助として各育成協には５万5、000円ずつ分けています。その内4、000は、市の育成協の活動を維持するためにいただいています。

（横坂委員）

分かりました。

（雲尾議長）

５万円掛ける 60 で 300 万、だいたいそんな額なのですね。

（鶴巻委員）

活動に関しては、各育成協の活動、それぞれが広報に使ったりとか、何に使うのかは、それぞれの育成協に任されていますが、総会までにはきちんと収支決算報告書が上がりますね。

（横坂委員）

分かりました。すいません。

（雲尾議長）

資料５、補助金につきましていかがでしょうか。意見としてはこれでこのまま進めていただいていいということでよろしいですかね。ありがとうございました。

それではここで５分間の休憩をはさませていただきます。事例研究につきましての準備がございますので。準備ができ次第再開します。

― 休 憩 ―

３．事例研究

（１）学生パソコン応援団「エール」との懇談

（雲尾議長）

まず事業概要につきましては生涯学習センターより説明をお願いいたします。

（生涯学習センター次長補佐）

それでは、この時間、地域と学ぶパソコン教室「エール」についてご紹介をさせていただきます。資料６の一番下、太枠で囲ってある事柄について概要を説明させていただきます。

まず、パソコン関連のボランティアによる講座というのは、当センター、比較的充実していまして、下から３番目のパソコン指導ボランティアというところの欄に、２行目、パソコン若葉とまなびぃの森というのがありますけれども。まず、パソコン若葉については、市民のボランティアの方が全くパソコンを使うのが初めてだという方に対して行う講座になっています。それに対してまなびぃの森というのは、それを受けた方が、自分で自ら課題を持って、もうちょっとこんなことが分からないのだけれどということで、要は自主学習に来る。そんな講座がまなびぃの森で、教育と学習という視点で２つ設定をしております。

今日ご紹介するパソコン応援団「エール」は、新潟高度情報専門学校の先生、そして学生さんがひと肌脱いでくれて、市民の方々にパソコンを教えてくれています。大変好評で、受講者の方々は、学生たちが教えてくれると言ってよろこんでいただいていますし、また、学生さんたちも、普段あまり話すことのない年代の方と話しますので、良い機会になっているようです。あとは、自分たちが教えるということの難しさを体験してくれて、自分たちも勉強になりました、などという感想をいただいています。

平成 27 年度は、ここに記載の通り、年２回行っていました。今年度、28 年度については、先生、学生も、もうちょっと私たちに力を貸してもいいわよということで、年４回、開催してもらいました。中身については、グーグルマップを使った観光の案内ですとか、年賀状の作り方などということを、市民の皆さんに教えていただきました。

来年度も、今年並みには頑張りたいとお話をいただいています。細かい説明については、このあと、学生さん、そして先生にバトンタッチをしたいと思います。それではよろしくお願いします。

― エール説明 ―

（雲尾議長）

ありがとうございました。それでは、今ほどご説明いただきました内容につきまして、社会教育委員から質問等ありましたらお願いいたします。

（横坂委員）

受講者の感想のところで、自分でもできるかもという感想があったのがすごいと思いました。というのは、そこに立つことができるというのがスタートラインで、でも、１人だと立てないのですよね。そこに立たせてもらったという成果が、そこからはつながっていきますけど、そこに立たせていただいたというのは、とても大きな受ける側の収穫だったと思います。ありがとうございました。

（渡邊委員）

お聞きしていて大変いいことだなと思いました。２点お聞きしたいのですけど、１つはＯＢの方は参加されているのでしょうか。

（担当講師）

いえ、参加しておりません。

（渡邊委員）

現役の皆さんだけでやられているのですね。

あともう１点なのですけど、先ほどのお話の中で、子どもや若い世代向けの講座を検討する必要があるかなという話がありましたけど、そのことについては、今後どのようにお考えでしょうか。

（担当講師）

子ども向けになると、夏休みであったりとか、子どもの塾が終わるような時間帯になるので、そこの時間でできることで。生涯学習センターの中でできることとなると、限定されるのかなと思うのですが、簡単なプログラミングみたいなことで楽しくプログラミングを学んで、ちょっとしたゲームみたいなものを作ったりとか、そういったところから入るのもいいのかなと思っています。

（渡邊委員）

ありがとうございました。

（鶴巻委員）

一番下のところ、学びの循環に対する姿勢。一番上が学びの循環を意識した取組、一番最後が学びの循環に対する姿勢とあるのですけれども、具体的にはどういうことを思っていますか。

（学　生）

取組に対して、姿勢に対して具体的にどう思っているかということですか。

（鶴巻委員）

具体的には何を指すかということですね。どういうことでしょうか。多分、やった中でこれは課題だなというのがいくつかあったと思うのですよね。それをまとめた言葉だと思うのですけど、具体的にそう思ったものはなにかということです。

（担当講師）

今回、この機会をいただくに当たって、学びの循環という視点から発表ということだったのですけれども、循環というところをあまり意識していなくて、連携とか、協働とか、共に学ぶといった意識で取り組んでいたのですが、循環というところまで意識していなかったな、と。そのような中で、改めてこの機会をいただくことで、じゃあ、どういうふうに自分たちにフィードバックしていくのかなとか、このあとどういうふうにつながっていくのかなというところを、改めて自分たちで振り返ることができて。なんとなく、やって終わり、みたいな、いつか効果が出ればいいよね、くらいにしか考えていなかったのですけども、もうちょっと循環して、直接的に戻ってくるようなことをもっと意識できたらよかったのかなと考えています。

（鶴巻委員）

ありがとうございます。

（生涯学習センター次長補佐）

補足になるか分かりませんけども、先生と打ち合わせをしている中で、学生さんたちを社会に送り出すというのに一生懸命な先生でいらっしゃって、情報処理をするための学生を育成する学校なのですけど、社会に出れば必ず、会社の中で自分の意見を通して業務を進めていくというチャンスがものすごくたくさん出てくる。そのために、今回のパソコン講座を、機会を与えてもらったことが非常に

大事だと。ただそのつもりでやっていたのですけれど、実はそのことが、学んだことを、学生の学んだことが、先輩であったり、もしかしたら子どもたちとなるかもしれませんけど。実は、学びというのが循環していくのだということに気がつかれたいいチャンスだったということをおっしゃっていたので、そんなことが、今後の課題の中の２つの項目に上がったきっかけだと思います。

（鶴巻委員）

それでは、このパソコン講座をやっている生徒も、それが今後につながる循環であり、受けている高齢者の方も、たぶんスイッチの入れ方からという方もいらっしゃったでしょうし、いろいろな方がいらっしゃたと思うのですけど、受けている方も、このパソコン講座を受けたことによって、またつながって行くという、お互いにいろいろなところで循環作用が起こるということの認識でいいのでしょうか。

（生涯学習センター次長補佐）

はい。私が応えて申し訳ないのですが。自分の周りにいっぱい自分に教えてくれるティーチャーがいっぱいいるのだなと、お互いの気づきになったことは間違いないと思います。

（鶴巻委員）

ありがとうございます。

（雲尾議長）

そのほか、いかがでしょうか。

（横坂委員）

世代間交流が今、難しいといわれている時代に、こうやって自然にそこに立って１つの画面を見ながら話ができるって、実は普通の社会の中では普通ではなくて。相手のリズムや感性にそっていかれたということは、すごくお年寄りにとってもうれしかったと思います。それと、普段接点のないご年配の方を見ても、おじいちゃん、おばあちゃんに気軽に話しかけられるようになるとか。そういう、パソコンだけではなくて、社会の中でもスムーズにいく道を学んでいらっしゃったのではないかなということを、発表された言葉の中から感じることができました。

（担当講師）

なかなか、直接会話を合わせようと思っても、接点が無いと話しにくいですし。実際の家族で、例えばお孫さんにもそのことはできると思うのですけど、どうしても家族だと、面倒くさいとか、またなのみたいなのを言われるから聞けないのよ、という方もいらして。そうですね、いい関係というか、距離を持ってできたことがよかったと思います。

（中央図書館長）

いつも生徒さんでいらっしゃるのだけども、今回立場がチェンジして、学んだことを誰かに教えるという気持ちは、どうでしたか。

（学　生）

気持ちですか。そうですね、やはりなかなか難しいというのがありました。実際に行ってみてなのですけど、掛け合い方式でやったというお話をさせていただきましたが、私が前に立って、２人でやるうちの先生役をやったのですが、私が教えて、生徒役の人が操作をして、そして皆さんもやってみましょうというのを繰り返すという方式でやっていたのですけど。実際、生徒役の人が操作している最中に、受講者の方々も一斉に操作しだしちゃう、というようなことがありまして。そういったところが、難しいなと感じました。

（中央図書館長）

でも、おじいちゃん、おばあちゃんたち、分かったありがとうみたいな顔して帰ったのでしょう。その時どう思いました。

（学　生）

やはり、やって良かったなと。

（中央図書館長）

うれしかったですか。それが学びの循環なのかもね。

（小川委員）

基本的なことを伺いたいのですけど。先ほど出ていた、講師の方が２名で、学生やサポーターの方は10名くらいでしたかね。１年生と２年生で２学年でやってらっしゃるのですかね。ワードとインターネットみたいなもの。そうすると、例えば１学年の10数名の方というのは、基本的には希望者を募るのですか、それとも何かあるのですか。

（担当講師）

何かあるというか、それしか学生がいないという。全体的に人数が少ないのですけども。

（雲尾議長）

１学年十数人くらい。

（担当講師）

学年の中から対象のクラスをまとめると、だいたい20人いるかいないかくらいで。それでこちらのお部屋がマックス14名なので、それに合わせて、なるべく１人に１人付くようにとすると、どうしてもその人数になってしまって。希望制ではなくて、授業でやって。この授業を取っている学生が全員。

（雲尾議長）

授業の一環なのですね。授業の一環で、その中でこういうことをやりますからといって当てはめていくと、ここの設備の問題があって、だいたいこの人数になるということですね。分かりました。

そのほかいかがでございましょうか。

小林さんにお伺いしたいのですけど。学びの循環、積み重ねでいうと、あなたは、後輩にですね、自分の経験を後輩にはどのように伝えたいですか。

（学　生）

後輩に対して、例えば今、後輩が行っている授業に関して分からないことがあったりしたときも、うまく教えられたなったという経験から得た、専門用語を多用せず、内容をかみ砕いた説明をする、など、そういうのを意識して説明していきたいなという考えではあります。

（雲尾議長）

ありがとうございます。そのほか、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

（渡邊委員）

今、インターネットの使い方講座が終わった方は、次は、まだワードの使い方講座に、おそらく移行していくのか、それぞれどちらが先か分かりませんけれど、だいたいそのような感じで受講されているのでしょうか。それとも、別々の方々が参加されているのでしょうか。

（担当講師）

おそらくなのですが、市報にいがたとかで募集をして、結構たくさん応募されていて、そこから抽選しているので、必ずしも１つ目をうけて２つ目を受けているというわけではないと思います。たまたま当選した方は、そのような形で講座を受けているのですけれども、そうでない方は、残念ながらいつまでたっても受講できないというような状態であったりとか、どちらかしか受講できないというような形だったりしていると思います。それもあって、今年度は１つの講座を２回ずつやって、少しは満足いただけたのかなと思います。

（渡邊委員）

ありがとうございます。というのは、高齢者がどんどん増えていくと、この２講座、４回では足りなくなってくるのではないかなという懸念があったものですから。引き続きお願いしたいと思います。

（横坂委員）

人気講座なのですね。すごい、抽選、講座によっては人集めに走らなくてはいけない講座もありますよね、企画としては。でも抽選でないと当たらないというのは、ものすごいことですよ。というのは、やり手がいい、方法がいい。これはすごいことですよ。

（担当講師）

ありがとうございます。

（雲尾議長）

そのほか、いかがでございましょうか。よろしいでしょうか。

では、３、事例研究学生パソコン応援団「エール」との懇談につきまして、これで終了とします。本日は貴重なお話をありがとうございました。お二人はここで退席されます。ご説明いただいたお二人に盛大な拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

（全　員）

ありがとうございました。拍手

（雲尾議長）

では、以上で事例研究を終了いたします。

４．その他

（雲尾議長）

その他の連絡事項がありましたら、お願いいたします。

（横坂委員）

成人式に出させていただきました。３人子どもがいて、１度も見ておりませんので、初めて成人式に行ったという感じだったのですけれども。その時に配付されたものですね、いろいろなプリントがピンクの袋に入っていて、初めて見ました。うちの娘たちは、すぐ２次会、３次会でしたので、帰って来たときにはその袋を持っていませんでした。

初めて何が入っているか見たのですが、これは捨てられるなと。必要な人には必要、こんな悩みのときにはこう。でも、せっかく新潟市ですから、政令市ですから、もうちょっとおしゃれな、例えばマリンピアの割引券とか。何か切り取るものが中に入っていたのですけれども、それだったら例えば、新潟市で二十歳になった皆さんへ、命の大切さと美しさを感じるために、１回無料券のおしゃれな、お財布に入る招待カード。それから新潟市美術館で開催される１年どれでも無料という券を、美しいものを感じる心を育ててください、とか。個人的なことで申し訳ないのですが、そういうメッセージ性のあるプレゼントが入っていたら、私が成人だったら、あら、と思ったかなと思ったりして。感想でした。以上です。

（雲尾議長）

当日私も感じたのですけれど、終わったあと、会場を見て、ざっと 100 個くらい落ちていましたね。4、700 人参加して 100 個くらい落ちるということは、かなりの高率だなと思って。これが新成人かと、少し暗澹たる思い。例えば来年出たら、絶対落ちている数を数えると思うのです。正確に統計を取って、何区のあたりに一番多いかとかというようなこともしてみようかなと少し思ってはいます。

（横坂委員）

全部見たのですけれども、これは落とされてもしかたがないかなと思ってしまいました。

（雲尾議長）

マリンピアの無料券も入ってはいるのですけれども。入っているけど、期日も短いし、まあいいかみたいな話にはなりそうな形でありますので、それは、主管課と実行委員会で検討していただくことになるかと思います。よろしくお願いいたします。

そのほか、ございますでしょうか。ありがとうございました。

それでは、事務局に進行をお返しいたします。

５．閉会

（事務局）

長時間にわたるご審議、ありがとうございました。次回につきましてはまた改めてご連絡させていただきます。以上を持ちまして第 32 期社会教育委員会議（第５回）を終了いたします。皆様、大変お疲れ様でした。